

(附記)

僕の引用した『息子と恋人』のテキストはペンギン版である。

ハリ・T・ムーアの研究書とは、

Harry T. Moore: *The Life and Works of D. H. Lawrence*

『奥の細道』小見 (二)

板 坂 元

三、「侍り」について

奥の細道の中で「侍り」は動詞または補助用言として三十三個所用いられている。普通、これらは丁寧語として、口語の「ます」「です」「ございます」に云いかえられるものとして説明されているが、その一つ一つを検討して行くとそれらのすべてが簡単な云いかえではかたづけられない場合も少なくないようである。実のところカードをとつて分類を試みたけれども結論的なことは出て来なかつたので、一応その現象を指摘するにとどめて大方の御示教を得たいと思う。

「侍り」が四段活用化していることはすでに諸家の云われている

(London: George Allen & Unwin Ltd. 1951)
である。この小説については、同書の九二頁―一〇六頁、ジエシ・チェンバースについては、右の箇所及び附録D三六五頁―三八七頁を参照した。

ところなのでいちいち註しないことにする)

里の童への来りて教ける、「昔ハ此山の上に侍しを、往来の人の麦草をあらして此石を試あそぶ侍をにくみて此谷につき落せハ、石の面下さまにふしたりと云。さもあるへき事によ。 (二七・一、例文は前回と同じく杉浦氏の「校註奥の細道」による。句読点、ふり仮名等は筆者がほどこした。数字は頁数行数をそれぞれ示す。以下同じ)

引用された会話文中の「侍り」すなわち「ます」「です」の口語におきかえられるものは右の例をはじめとしていくつか認められる。これについては問題がないわけだが、全体の数からすると頻出の割合は低いようである。

とりあへぬ一句を柱に残^{のこ}侍^{はべり}し(一九・二)此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よ所ながら眺やりて過るに(三二・六)

前の会話文の場合と同じく主語が一人称で、話し手の動作をあらわす語につけられたものであるから、同様に「ます」「です」で云いかえのきく個所であるが、その「侍り」をふくむ文全体が敬語的な修辭で一貫していないことがあり、その場合機械的に「ます」「です」を置きかえると不自然なものになつてしまう。もちろん、そのうちで一節の結びの部分のみに「侍り」が用いられているものは(例えば右の例の前者)それなりに統一性をもつと考えることができるが、文中に思ひ出したようにほつんと「侍り」が現れた場合、これをいむゆる丁寧語としてあつかつてよいものかどうか疑問である。芭蕉の意識の中でよく然とでもその場合にもいむゆる話手の聞き手に対する敬意というものが存していたと判断してよいものだろうか。以下の諸例と比べ合せて考えるべきである。(なお、右のような「侍り」はもつとも多く全体の半数に近い割合をしめている)

実盛討死の後、木曾義仲願状にそへて此社にこめられ侍^{はべ}りし、樋口の次郎が使せし事共まのあたり縁起にみえたり(八五・八)花山の法皇三十三所の願礼とけさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて那谷と名付給ふとや。那智谷字組の二をわかち侍^{はべり}しとそ(八六・七)

このような場合の「侍り」は、少くとも丁寧というより尊敬と云われているものに近いであろう事実、手許にある十数冊の注釈書には「給ふ」と同様にあつかつているものが多いのである。これは奥の細道の中では、ごく数例にすぎないが、芭蕉文集で調べると同様な例がかなり見出される。

ところが逆に身分の低い者の動作をあらわす語の下にも、「侍り」があつかつられている。

此口付のおのこ短冊得させよと乞^{こぼ}ふ。やさしき事を望侍るものかなと(一九・四)

……此馬のと、まる所にて馬を返し給へとかし侍^{はべり}ぬ(二三・六)

主語はいずれも農夫・馬子の類である。両者とも一字一句ゆるがせにしない態度で注釈をした人は思ひわづらわれたであろう。(私の調べたかぎりではそこまで留意されているものはわずかに一冊である)はたしてどうとりあつかつてよいのか早速には結論を下すことができない。ましてつぎのような場合はどれにあてはめてよいのか、今まであげたいずれの場合にも解釈出来そうなのである。

尾花沢にて清風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれとも志いやしからず、都にも折々かよひてさすかに旅の情をも知たれハ、日比と、めて長途のいたはりさまくにもてなし侍^{はべり}る(五九・二)

一節の終りの個所に結びのような形で用いられたものか、尊

敬のつもりなのか、田夫野人と同じものであるのか、せんざくをして行くことになつて来る。

以上の外に、「申し侍る」「申し伝へ侍る」「に侍る」等が慣用句的に使われている例が若干ある。これらは芭蕉が平安の文章を読んでいるうちに彼の記憶に熟してきたものであろうか。

中古文で「侍り」が「ます」「です」等がつねにおきかえられるとはかぎらないことについては、阪倉篤義氏の「侍り」の性格（国語・国文二・十、二一九号）に指摘されているが、芭蕉の場合これとまつたぐちがつた段階で相似た同じことが認められるような気がする。おそらく芭蕉は中古文を読んでこの「侍り」を用いることを学んだのであろうが、その場合にはつきりと中古文そのままの「侍り」の用法を身につけたわけではなく、口調の上である動詞と結びつけて覚えたり、「侍り」を使つてもよいような場を漠然と記憶したりしたものもあつたに相違ない。そのために話手の聞き手に対する敬意の表現という用い方だけではなく、種々の混同が用じたのではあるまいか。そしてそれらを通じて彼の「侍り」の用法は、ばく然と敬語一般といつたような性格のものとなつたのだと思われる。したがつて、「ます」「です」と置きかえるだけでは解釈のつかない、時にはまつたく理解に苦しむような例も見出されることとなつたのだと思う。

四、「今更むかし語とハなりぬ」

山中で聞いた安原貞室の逸話を録した部分である。読み過しやうい個所だが、この「今更」という語がちよつと気にかかる使い方である。これは今日でも「いまさらそんなことをいつてもはじまらない」「いまさら何をいうのか」のように否定的な内容と対応して用いられているものだが、こういった系列の意味がいつから、古くはさら新しの意味の語であつたものから分化したものであろうか。例えば

今更御覽し忘れける、唯夢とのみこそ思召せ（平家物語・小督）
なぞでは、「今更」はすでに芭蕉の例に近いものとなつている。これがどこまで遡り得るものか。

なお芭蕉は
彼日向守の妻髪を切て席をまうけられし心ばせ、今更申出
て（明智が妻）

で「今更のように」の意味でも使つてゐる。ただ、この例の場合も、「今更」と助詞も何もつけないで用いてゐるのは面白いことである。

五、「感応殊しきりに覚えらる」

与市扇的を射し時、別してハ我国八まんとちかひしも此神社にて侍ると聞に、感応殊しきりに覚えらる（一五・八）
「おぼゆ」という動詞が発生的には「思ふ」に助詞「ゆ」

がついたものであることは周知のことであるが、意味も「覚
ゆ」自体に自発の意味があつたため、古くはそれに「らる」
をつけるというとはなかつたようである。ところが、芭蕉
はこの外にも例えげ

辺土の遺風忘れさるものから殊勝に覚らる(四二・四)

封建時代の女性像

——近松の「おさん」をめぐる——

茂手木 恵子

「をと、しの十月中の亥の子にこたつあけた祝儀とて、まあこれ爰
で枕並べてこのかた、女房の懐には鬼が住むか蛇が住むか、二年と
いふもの巢もりにして、やうくは、様をち様のおかげで、陸しい
めをとらしい寢物語もせうものと、楽しむまもなく、ほんにむごい
つれない。さほど心残らば泣かしやんせく……」

悲しいうつつたえの言葉である。周知のごとく、これは近松門左衛門
の「心中天網島」に出てくる「おさん」のくどきの名台詞といわれて
いる。他の女性に心を奪われ、子までなした仲の自分をかえりみない
夫に対する悲しい抗議の言葉といつてよい。しかも、二百年も前に生
きたこの悲劇の女性の生涯は、すでに過ぎ去つた風俗のながめとして
見すごせないものを含んでいるように思われる。そこに女の悲しみと

のように「覚えらる」という表現をとつている。こういう云
い方がいつころからあつたものか。芭蕉は感覺的な新しい用
語法をする人なので、こういつた点にもそれが現れているの
かどうか、大方の御示教をいただきたい。

(本学専任講師)

負い目がある。

近松の世話浄瑠璃の多くは、その没後もしばしば改作されたり、歌
舞伎化されたりして、その適應の強さを示してきているが、近代にな
つて特に原作に対する新しい解釈が試みられることになつた。ごく最
近の事例としても、雁治郎・扇雀による「曾根崎心中」や、北条秀司
の脚本「堀川波の鼓」、「大経師普曆」の映画化「近松物語」などがあ
る。このような近松物の再演や新訳が脚光を浴びるという事實は、や
はり二百年の歳月をへだててなお色あせぬ普遍的な人間性が把らえら
れているからであらう。「おさん」は現代にも生きている。

元祿時代は、近世ルネサンスとして絢爛たる町人文化の開花期とい
われている。けれども、幕府の政策による強力な封建制は、庶民階級
への政治的、社会的関与が激しく、個人の行動は五人組制度等の相互
牽制によつてくびきをかけられ、人間の自由は天窓の星のように乏し
い光を享受するにすぎなかつた。したがつて、町人文化の絢爛たる開
花といつても、つまりは限られた自由、紐つきの自由として、ただ官
能の花粉を撒きちらしたにすぎない。

近松は武士の家に生まれた。しかも刀を捨てて、当時まだ河原乞食